



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

2020年11月8日 年間第32主日A年

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読 知恵の書 6章12—16節

第二朗読 書とパウロのテサロニケの教会への手紙 4章13—18節

福音朗読：マタイによる福音書25章1—12節

今日の福音から

『『十人のおとめ』のたとえ』と呼ばれている今日の福音の朗読箇所は、決して分かりやすいたとえ話ではないようです。古代の教父たちはたとえの中でおとめたちが待ち焦がれている新郎はキリストであって、キリストの再臨に備えなさいという意味であるとしました。この新郎＝キリスト論は現代にいたっても続いている解釈の一つです。それによれば、イエスさまがこのたとえをお話になったとき、間近に迫っていた最後の審判に対して「準備しなさい」という意味をこのたとえに込めていたと考えます。そして、福音書が成立して初代教会の時代にこのたとえ話が人々に伝わっていく中で、主イエス・キリストはいつか必ずやってくるのだ、再臨の時は必ず来るのだ、だからその時に備えて「準備しなさい」という教えとなっていくという理解です。

このような終わりの時の主の再臨に備えるという立場からたとえ話を読んでみると、例えば「油」は信仰や美德、良い行いなど、人に分け与えることのできない大切なものと理解され、「ともじび」は聖霊の火であると理解されてきました。しかし、それでは花婿を待ちわびて、婚宴という喜びの場面を伝えるお話しが、いつの間にやら「裁き」とか、しっかり準備しなさいという「脅迫」のニュアンスを帯びたものになってしまいます。実を言うとわたしも、このお話しを上あげたような理解で受け止めていました。ただ、読めば読むほど腑に落ちない点があるのは確かなのです。今回もう一度、ていねいに読んでみました。いろいろな気づきがありましたので、ここで皆さんと分かち合いたいと思います。

多くの立派な学者さんたちは、このたとえ話がイエスさまが実際に語ったものではないと

理解しています。おそらく初代教会の人々が作りあげたものだろうと想像しています。もちろんそのことに反論する学者さんたちもいるようで、これはイエスさままでに溯る、つまりイエスさまがお話になったものだと考える立場もあります。ただ冒頭の「そこで、天の国は次のようにたとえられる」(25章1節)と最後の「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから」(13節)は、マタイによる加筆であろうという点では一致しているようです。学者さんたちの論争はさておき、わたしたちは聖書のことばを「神のみことば」として受け取ったのですから、今日のミサで読まれる福音の箇所をイエスさまのおことばとして受け入れましょう。

このたとえ話をよく理解するためには、パレスチナ地方の婚姻の習慣を知っておく必要があるかもしれません。この習慣は現代にも生きているものです。婚姻の儀式は成人男性二人が証人となって、二つの段階を経てなされました。最初は、新婦の父親の家で行われる儀式です。新郎は結婚の契約書と結納金を父親に渡しました。この時点で、二人の男女は結婚したことになりますが、しばらくの間、新婦は父親の家に留まっていたといわれています。そして一年から二年を経て、婚姻の第二段階へと進みました。新郎はもう一度新婦の父親の家を訪れ、結婚の契約の交渉を行いました。ここでは離婚や夫の死別による婚姻解消の際に新婦側に払われる金額が話し合われたといえます。そして、交渉が長引いて、新郎の家での祝宴へと向かうのが夜になったこともあったようです。無事交渉が成立すると、カップルは新婦の家から新郎の家と行進しました。その際に、おとめたちがランプやたいまつをともして、歌とダンスで付き添ったそうです。わたしも、エンカレムのそばで新郎の到着を待ちわびている花嫁さんの一向に出会ったことがありました。きれいな花嫁さんと、おとめたちのグループでした。後で沈む夕日に向かって一人静かに祈りを唱えている花嫁さんの姿をそっと見て、とても感動したのを覚えています。

「十人のおとめ」(1節)とあります。十は完全の象徴として用いられた数字です。「おとめ」はパルテノスといいますが、結婚適齢期のお嬢さんのことですから十二歳から十三歳くらいの女の子のことでしょう。彼女たちは新婦のお友達で、新婦と一緒に行進を待つ、新婦の付き添いです。今のことばでいえば「婚活」みたいなもので、付き添いの役目をきちんと果たすのは、将来よいお嫁さんになりますよというアピールの場となりました。

「ともし火」(1節)はランパスですが、これは通常、トーチを意味したことばだそうです。通常の手持ちのランプはリュクノスと呼ばれていました。通常ランプは数時間燃えますが、トーチですと十五分ほどしか燃えません。ただ、聖書の中でランパスとリュクノスの使い分けはあまり厳密ではないようです。「ともし火を持って」(1節)の「持って」はランバノとギリシア語でいいますので、ランパスをランバノと語呂合わせを三回繰り返したのかもしれませんが(1、3、4節)。

ここで少し疑問が生じます。場面はどこなのだろうという疑問です。十人のおとめは新婦の家で交渉中の新郎とその後に続く新郎の家での婚宴への行列を待っているのでしょうか。それとも、彼女たちはすでに新郎の家において、新郎が来るのを待っているのでしょうか。「花婿を迎えに出て行く」(1節)は新共同訳です。新郎の家で待っているとも、新婦の家で待つ

いるとも読めます。フランシスコ会訳で「明かりを手にして花婿を出迎える」(1節)とありますので、どうも新郎の家、つまり婚宴が開かれる場所で待っているイメージが強いです。しかし、宴席でランプの油が足りなくなることが考えられません。ましてや夜中に町に買いに行く必要もないでしょう。ここでは、当時の習慣に従って十人のおとめたちは新婦の家で待っていたと理解しましょう。

「そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった」(2節)。いきなり、十人のおとめたちは愚かと賢いに分けられてしまいます。愚かと賢いの基準はこの時点では分かりません。ただ、男性にとって都合のよい女か都合の悪い女という見方があります。実際にイエスさまのお話しの耳を傾けていた人々は圧倒的に男性が多かったでしょうか、殿方にとっては、女性を物笑いの種とするジョークとして耳をそばだてたかもしれません。片隅で聞いていたご婦人たちにとっては、また女性を馬鹿にする話しかという印象を受け取ったかもしれません。

賢いおとめたちは「ともし火と一緒に、壺に油を入れて持っていた」(4節)とあります。新郎と新婦の父親との交渉が長引くのを見越していたのでしょうか。案の定「ところが、花婿の来るのが遅れたので」(5節)、十人のおとめたちは「眠り込んで」(5節)しまいました。

「花婿だ。迎えに出なさい」(7節)の声におとめたちは「それぞれのともし火を整えました」(7節)。「整える」はコスメオーですが、秩序を意味するコスモスに由来します。コスモスは秩序のある整然とした状態を指すことばで、宇宙や世界を意味しますし、身なりなどを整える装飾品の意味もあります。コスモスの花はこのことばから来ます。化粧品を表すコスメティックもこのことばから生まれました。おとめたちは新しい油を満たし、明るく燃えるように整えたのです。しかし、愚かなおとめたちは予備の油がないことに気がつきます。賢いおとめたちに油を分けてくれるように懇願しますが、断られてしまいます。

ここでもう一つの疑問が生じます。なぜ油を分けてあげなかったのでしょうか。「いいえ、分けてあげるにはとても足りません」(9節 新改訳 2017)。直訳すると「万が一にも足りなくなるようなことが決してないように」となるそうです。自分たちの分も心もとなかったのでしょうか。「店に行って、自分の分を買って来なさい」(9節 新共同訳)と賢いおとめたちは、暗い夜の町へと愚かなおとめたちを追い出します。夜中に店が開いているはずもなく、しかも結婚式の晴れ着を着た女性たちが街の中を油を求めて右往左往するのです。滑稽な姿が目につかびますし、何よりも危険です。婚礼の宴は一晩中催されたそうですので、食料と油を売る店は一晩中開いていたと仮定する学者さんもいるようですが、どうもこじつけがましいです。

賢いおとめたちは自分の役割をしっかりと把握していました。だから用意周到に準備していました。それは当時の世間から期待される女性像です。お嫁さんに来てほしい女性の姿です。しかし、そのような役割を果たすことを大切にするような生き方は、そうではない愚かなおとめたちを切り捨てることとなります。競争社会で生き残れない女性たちを切り捨てることになるのです。わたしは、この賢いおとめたちの「賢い」答えの中に現代社会の縮図が見えてならないのです。愚かなおとめたちが油を買いに出かけている間に、新婦の父親の家から新郎の父親の家へと

向かう結婚の行列が始まりました。そして、行列が終わると、賢いおとめたちは祝宴の会場へと入ります。「戸が閉められた」(10節)。残されたおとめたちがやってきて、戸を開けてくれるように頼みますが、「はっきり言っておく。わたしはお前たちを知らない」(12節)にべもなく断られてしまいます。

ここも理解が難しいところです。愚かなおとめたちは油を手に入れたのかもしれませんが。もしかしたら手に入れなかったのかもしれませんが。でも、会場に入ることを断られます。彼女たちは祝宴に招かれたゲストです。しかも、新婦の介添えする役目を担った大切なゲストです。「わたしはお前たちを知らない」(12節)はあまりにも冷たい仕打ちではありませんか。不寛容でホスピタリティがありません。パレスチナ地方ではゲストに対しては至れり尽くせりのホスピタリティを示すのが通例でした。アブラハムは見知らぬ旅人をもてなして、神の祝福をいただきます。イエスさまへのホスピタリティの証しとして罪深い女は自分の涙でイエスさまの足を洗いました。しかし、このたとえ話に登場する主人はホスピタリティのかけらもありません。おもてなしの気持ちもありません。

イエスさまから実際このお話を聞いていた人々は、最初はジョークのように捉えていたでしょうけど、主人の態度を聞くにつけて、単なるジョークではなく、何か別なことを伝えようとしているのだと気がついたと思います。何よりも、自分たちの伝統に反して、ゲストを閉め出す主人に対して怒りまではいかないでしょうけど、不快感を感じたことでしょう。そればかりではありません。賢いおとめたちの言い草も変ですし、お互いに協力しあって新婦への介添えの役目を果たそうとしないおとめたちも変です。そして、閉め出された五人のおとめたちがもう一度、祝宴の会場に入れるように執りなしてくれる人物が登場しないのも変です。普通だったら新婦が、あるいはその家族が、もしくは新郎が執りなしてもいいはずですが。愚かなおとめたちも大切な祝宴のゲストだからです。ホスピタリティを示し、しかもお互いに助け合い、困ったときには融通し合うのが、ローマ帝国の支配下で苦しみ続けていた庶民たちの生きる姿だったはずですが。そんな「優しさ」のようなものがこのたとえ話には見えてこないのです。それが一番の疑問です。そして加えるなら、美しく着飾った花嫁さんが登場しないのも疑問です。

一体全体、このたとえ話でイエスさまは何を語りたかったのでしょうか。福音朗読の最初のことばに何かヒントがあるようにも思えます。「そこで、天の国は次のようにたとえられる」(1節)。これは「天の国は、これと比べてみなさい」とも訳せるようで、そうなると、イエスさまのたとえ話は、実は逆説のたとえ話だったのかとも考えられます。イエスさまは、「主人の不寛容やホスピタリティのなさに呆れているでしょ？ 賢いおとめたちが愚かなおとめたちに冷たく当たって、自分たちの役割だけを果たそうとしているのにながっかりしているでしょ？ 結婚式なのに花嫁さんが登場しないのにもなんだか釈然としないでしょ？」と問いかけたかったのかも。

そして、「あのね、天の国はこの世のあり方とはまったく違うんだよ。だから、神さまは賢いおとめたちだけを受け入れて、愚かなおとめたちを受け入れない方ではないんだよ。天の国の祝宴は、誰もが入れる祝宴なんだよ」と伝えたかったのではないかと思います。